

ショーペンハウアーの幸福論と幸福のリソースの所在について

2019 8/9

経済学部 吉田 響

(1)はじめに

今回、なぜ私が「幸福」というテーマに対してショーペンハウアーというテーマを選んだのか、という理由であるが、それは単に私の趣味である。私は趣味でよく漫画やゲームなど、日本のサブカルチャーに親しむのだが、私が好むそれらの中にはドイツの哲学者の影響を受けているものが多分にある。例えば、PCゲーム「素晴らしき日々」のテキストには、多くの哲学者の言葉が引用されており、特に、ウィトゲンシュタインの影響、とりわけ「論理哲学論考」の影響が強く、テキストの中にそのオマージュと思われる文章が多く見受けられ、今でもファンの間では考察が続いている。「少女終末旅行」という、軍服を着た二人の少女が、核戦争で文明と殆どの人類が減んだ後の世界をあてども無く彷徨うというSF漫画では、直接の言及は無いものの、作品の背景にショーペンハウアーの「意思と表象としての世界」が登場している。このように、私の親しむ作品の中には多分にドイツの哲学者の影響が見受けられ、より作品を深く理解するためには、作者が影響を受けたであろうこれらの哲学者に触れることが重要であると感じた。また、特に「素晴らしき日々」の哲学限界への影響は強く、Amazonで論理哲学論考を検索すると、関連書籍として作品に登場した他の書籍が登場するほどである。

このように、私の好む作品の中にはドイツ哲学者からの影響が色濃く出ており、今回のテーマが「幸福」であったので、「幸福について」を著したショーペンハウアーについて書こうという動機となった。ウィトゲンシュタインについても草稿の中で「幸福に生きよ！」という言葉を残しているものの、それを理解するためにはあまりにも関連論文が少なく、諦めざるを得なかった。

今回のレポートでは、ショーペンハウアーの「幸福について」をベースとして、幸福のリソースを自身の内側に求めるか、現実たる外的世界に求めるか、また、どのような人間を幸福と呼ぶに相応しいか、ということについての考察を記す。

(2)幸福と欲望についての考察

古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、ニコマコス倫理学において、「賢者は快樂を求めず、苦痛なきを求める」という箴言を残しているが、この言葉はショーペンハウアーの幸福についての考察に適うものだ。ショーペンハウアー自身は、幸福について、「生きていないよりは断然ましだと言えるような生活のこと」とであると発言している。日本国憲法25条における、「健康で文化的な最低限度の生活」とも言い換えることができるだろう。つまり、ショーペンハウアーの幸福論は、加点方式ではなく、減点方式を採用している。最大の幸福、つまり、「生きていないよりは断然ましと言えるような生活」で得られる安らかさや幸福を100とし、そこから不幸になり得る事象、「不幸関数」とでもいうべきものを限りなく0に近似していく作業が、幸福に直結すると言えるだろう。

ただ、この不幸関数に含まれる変数の中には、当人の精神的な状態が多分に含まれている。時に自殺者が世間一般的に見たら非常に些細なことで死を選んでしまうのも、これが理由である。当人の精神的安定度と不幸に繋がりうる事象との積が不幸関数の中に含まれているが、この精神的安定度が非常に大きなマイナスであると不幸関数がマイナス100に限

りなく近づき、自殺を選んでしまう。不幸関数の絶対値が、これから人生で得られると予測される効用を上回ると人は自殺を選ぶ。

このために、ショーペンハウアーは幸福な状態には朗らかさ、肉体の健康が必須条件であると述べている。月並みではあるが、「笑う門には福来る」という諺の通りだ。また、特に後者については、ショーペンハウアーは「病める王よりも健康な乞食の方が幸福である」とも述べている。

幸福と深く関連するものに、もう一つ、欲望がある。エピクロスは人間の欲望について3つの分類を行った。第一に、生きていくために最低限度必要なものに対する欲望。欲望というより生存本能といったものに近いかもしれないが、衣食住に対する欲望である。第二に、生きていく上で必ずしも必要では無いが、自然である欲望、性的欲求である。第三に、生きていく上で必要でも自然でも無い欲望、贅沢や名誉欲に対する欲望である。この分類は紀元前に為されたものではあるが、近現代においてもまた共通点の見受けられる考察がなされている。アメリカの精神学者マズローは1943年ごろに、欲求五段階説を打ち出した。基本的な構造は、エピクロスの欲望の分類に近いものの、彼は、生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、自己実現の欲求と、更に細かく分類を行うとともに、新たな欲望の定義を行なっている。2000年の時を隔て、新たに人間の欲望が再定義されたことも面白いが、ここで更に面白いのは、人間の欲望の新しい定義である。このことは、特に先進国においては文明の発達に連れ人間の基本的欲求が殆ど満たされた状況になったため、新たな欲望の捌け口を発見し、欲望の達成に対するハードルが上がったとみて良いだろう。

また、人が何をもちて快樂とするかは人によって大きく異なる。例えば、性的欲求についてもそれは様々だ。特殊性癖というものがあることがその証左であろう。一般に見て、無機物に欲情したり、愛を感じるような人は少ないが、それでも一定数存在し、果てには結婚に至った者までいる。幸福や快樂が本人のみに観測可能な事象であるために、快樂や幸福の形も千差万別であるのだ。

(3) 幸福のリソースについての考察

19世紀のアメリカの詩人エミリーディキンソンは、the brain is wider than sky という作品を残している。この作品は、人間の知性の際限の無さと可能性を謳ったものだ。人間の脳が現実世界と比べて本当に比類するものなのかという議論はもちろんあって然るべきものだが、ここで重要なことは、我々が現実世界を脳を介してしか認識できない以上、少なくとも我々人間の認識の上では、精神世界と「現実世界」が同価値であるという点である。事実として、我々に観測の限界がある以上は、現実として認識できる現実には限界があり、また同様に、脳の中にも当然限界はある。前述したエミリーディキンソンの詩は、脳は海より深く、山より高く、空より広い、と言った内容だが、逆に言えば、知性がマントルを突き抜けることは無いし、大気圏に届くこともなく、少なくとも太陽系よりは狭いということである。また、人間が共有できる世界の範囲にも当然限界は存在する。人間が言葉を用いてコミュニケーションを取る以上、その言葉の限界が、人の共有できる世界の限界である。「目は口ほどに物を言う」と言うが、この諺は、言語の不完全性の証左に他ならない。

精神世界にせよ、外的世界にせよ、人間の世界には限界がある以上、その基本的な価値は等しい。

次に、幸福のリソースについての考察であるが、先のように、人間の世界を大きく「現実世界たる外的世界」と「脳に存在する精神的世界」の二つに分けた場合、どちらに幸福のリソースを求めるか、ということが問題となる。

まず、現実世界、即ち外的世界に存在する幸福のリソースであるが、このリソースは、人間の欲望を基としているために、相対的に目減りしていつてしまうものだ。先にエピクロスの欲望の分類から、マズローの欲求五段階説へ進化したことを記述したが、このように、人間の欲望は際限のないものだ。薬物中毒者のようなものである。一つの欲望が満たされたのならば、より高次の欲望を求めるものだが、それを達成するには困難が伴う。自身の能力や社会的地位に縛りがある限り、欲望の達成は遅かれ早かれ頭打ちになるだろう。薬物中毒者は、はじめこそ少量で済んでいたものの身体に耐性が付き、より多くの薬物を求めるようになる。しかし、現実世界に経済や法律が存在している以上、欲望を満たすに足る量の薬物を得ることが難しくなり、やがて金銭的にも社会的にも破滅してしまう。これは極端で過激な例であることは承知しているが、基本的な構造は似ている。

次に、自身の脳内の精神世界から得ることのできる幸福のリソースについて考察する。精神世界における事象は基本的には外部世界から輸入されたものである。恐らく、産まれたての赤子を、栄養剤だけ注射し、何も存在しない、真っ白な正方形の部屋に長年閉じ込めたとしたら、まるで末期の痴呆症患者のような人間に育つことだろう。その真偽は兎も角、オオカミ少年などの例も存在する。周囲の環境、つまり、外部世界の存在により人間の精神世界が形成されるということだ。

だが、それと同時に、人間の脳、精神世界は現実世界から情報を取捨選択して、現実世界とはまた異なった世界を形成していることもまた確かだ。精神世界は、外部から自分自身というフィルターを通して脳にとって都合の良い情報のみで形成される。そして、一旦輸入された情報は精神世界において自由に操作が可能、少なくとも、法や経済などの縛りが存在する現実よりも遥かに自由が効くのである。

中国の作家魯迅の代表作「阿Q正伝」では、主人公阿Qが「精神勝利法」という思考方法を用いて、現実世界の結果を自身の都合の良いように改変し、自分のプライドを守る。このように極端な例は稀だが、多かれ少なかれ同じようなことは多くの人が無自覚的に行なっていることだろう。

このように、精神世界においては、欲望の充足というよりも、どれほど自己満足できるかという点が大切になってくる。つまり、極端なことを言えば、精神世界における幸福は、現実世界と切り離して考えることが可能である。精神世界は現実世界の存在無しには成立し得ないものの、精神世界における幸福の獲得は、現実世界における幸福に比べて遥かに易々と入手可能なのだ。また、精神世界においては社会的制約も物質的問題も発生せず、欲望の充足ではなく、自己満足、安らかさが幸福の基準となっているため、幸福の獲得手段として優れていることがわかる。

(4) 幸福な人間の像について

ショーペンハウアーは、完全に幸福な人間について、このような例を示している。一つの完全に幸福な国家があるとすれば、殆どないし一切諸外国からの輸入を必要とせず、自国内で完全に満ち足りている国である。要するに、外部世界、つまり不確定要素を排除し、自身の内の世界における安定を求めるべきだ、ということだ。江戸時代、いわゆる「鎖国」政策における当時の世界ではキリスト教による異教徒への侵略や弾圧が行われてお

り、日本がその被害を免れたのは、西欧世界に対して殆ど付き合いがなく、完全ではないものの、自国内で完結していたからであろう。

このように、不幸関数の最小化を行うには、まず不確定要素をできる限り取り除く、つまり、現実世界への欲を最小化することが大切だ。そして、健康を保ち、朗らかさを失わず、自身で完結する快を実践することが大切である。このような人物を挙げるとすれば、古代ギリシャの犬儒学哲学者、ディオゲネスであろう。かのアレキサンダー大王が、彼に羨望の眼差しを向けたというのは有名な逸話だ。不確定要素たる現実世界の快を抑え、自身の精神世界の安らかさを楽しむことが、幸福になるための条件である。

参考文献

手塚富雄訳 ニーチェ ツアラトウストラI 中公クラシックス 2002年出版

高坂正顕著 ツアラトウストラを読む人のために 創文社 昭和46年出版

鈴木芳子訳 ショーペンハウアー著 幸福について 光文社 2018年出版

エミリー・ディキンソン著 対訳エミリーディキンソン詩集 岩波文庫 1998年出版

魯迅 阿Q正伝・狂人日記他十二編 岩波文庫 1981年出版